

女性の語りの妙

—カムイユカラ(神謡)の問題—

萩原 眞子

I カムイユカラの豊穣性

アイヌの口承文芸で大きな比重を占めている神謡のなかで、日高地方を中心に採録されているカムイユカラは基本的には女性の語りに属する。これはサケヘ(リフレイン)を特徴とし、一人称で語られる比較的短い説話である。そして、そのテーマや内容は非常に多岐多様であるが、そのなかで大きなまとまりをなしているのは動物神(カムイ)が語る神謡である〔萩原 1996:394-477〕¹⁾(以下、神謡とカムイユカラは同義である。)そのもっとも典型的な神謡は、動物・カムイと人間・アイヌ社会との関係をテーマとしている。次いで特徴的なのは恋愛や婚姻を語った神謡であるが、これは女性を主人公とする叙事詩を踏まえて生み出されたと思われるような話である。そして、この類の神謡が成り立った背景を推測するなら、明らかに女性の語りをもつ無限の可能性に思い当たる。つまり、神謡の要件であるサケヘというリフレインを挿入し、一人称で語るなら、どの

ような素材も神謡の形式をとり得るのであり、この点でアイヌの口承文芸の豊穣さの一端は女性の語りに帰せられると云っても過言ではなからうと思われる。

II 人間が叙述主体の「カムイユカラ」

さて、カムイユカラは、基本的にカムイ、すなわち、自然の存在(鳥獸や魚、昆虫など陸海の生きもの、風や雷、樹木や水など)による一人称叙述を特徴とする。しかしながら、叙述主体がその他の存在である場合、叙述主体が不明瞭である場合も少なからずある。久保寺逸彦著『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』には一〇六篇の神謡(Kamui-yukar)と十八篇の聖伝(Oina)が収められている。神謡のうち、叙述主体が動物であるのは六十二篇、守護神などが十篇、人工物三篇、人間十三篇、子守歌三篇の他、自叙神不詳が七篇ある。²⁾

アイヌ語のカムイには和語の「神」が当てられており、その用例にはいろいろあるが、叙述主体として人間が登場する例では、人間はカムイではあり得ない。人間が叙述する「カムイユカラ」という相矛盾する奇妙な説話は如何にして生まれたのであろうか。

III 少年の自叙

『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』には、人間が叙述主体の例として、少年が三篇、女が五篇、³⁾染退人などが五篇ある。

神謡八十七では、サケへ Hari wa o を伴って少年が「私は父親に育てられている」と語りだす。

あるとき一人海へでかけ、波の上に浮び出てきた美しい女の悲壮な歌を聞く。それは「私はまたなき首領の夫と暮していたが、魔神が夫に魅入り、夫が私を伴って浜辺へ出たときに、夫は私を抱きかかえて波の上に投げ捨てたので、私は死んだ」というものであった。それを聞いた父親は、翌朝、息子と浜へ行き、波を領する神に妻を返してくれるよう懇願する。女が波の上に出てくると、父親は海に飛び込んで、女を抱きかかえて引き返し、家に帰って、蘇生させる。こうして、「それから後はいつも変わりなく日を送っている」と結ぶ。

この神謡のテーマは何かの魔神に魅入られ、人間が自分の意思の埒外で思いもかけない行動に走り、そのために苦悶懊悩するという⁽⁴⁾ことにある。そして、海中に最愛の者を投ずるといふモチーフは神謡九十八「メナシの女の自叙」(サケへ Hau wa hau)、神謡九十九「^{しびちやうり}染退人の自叙」(サケへ No. o. n) の他、幌別の昔話としての「アオロン」[金田 1942:132-137]にもある。⁽⁵⁾その根底には娘を海神に捧げて、海幸や航海の安全を願うという北方諸民族にも共通する観念を見てとることができ、その広がりはいヌイットの「セドナ」説話にも及ぶ。

テーマとして特異な例は神謡八十八(サケへ Rukaninka huwō)の少年の自叙である。「大きな仆れ樹の下陰に私は付

着していた」と語いはじめる少年は、どれほどの長きに渉るものか、その身体には蘚苔や蕈^{きのこ}が生えている。そこへ女がやってきて、少年に、その場からの脱出方法を教える。その言葉通りに少年は父親のもとへ帰り、その後の人生を全うするという内容である。女は少年の母親の死霊で、事の次第は、

死んでから気がついてみれば、「木原の魔女が私の幸福を妬んで、お前をこの仆れ樹の下に隠した」のだと云う。

神謡八十九(サケへ Hore eie)は同じ内容であるが、子供は木の洞に隠され、そこで生きながらえているところを母親が見つける。この二つの神謡については心情的にいろいろな解釈があり得ようが、あたかも蓑虫のように人間が何かに被覆されるというモチーフは、やはりアムールランドの諸民族の口承文芸では決して珍しいことではない。

IV 女の自叙

神謡九十(サケへ Hunna ao)では、雷神と結婚した女が、天へ去った夫との惜別を嘆き暮らし、六年(の喪)が過ぎて新たに結婚をしたという身上を語る。神謡九十一(サケへ No. o. n)は、山へ薪を伐りに行った女が美貌の男(妖怪)と互いに頭や胸を切り裂き、血を呑みあって発狂した次第を語る短いものである。神謡九十二(サケへ Rukaninka huō, rukaninka)は、兄二人と和人のもとへ交易に出かけ、兄たちは(多聞にもれず騙されて毒殺され、辛くも故郷の浜へ戻ってきた妹が語る

兄弟たちの身の上である。神謡九十三(サケへ Hau o n)は「十勝の老嫗が啄木鳥を教え訓して歌った神謡」と題され、語り出しでは、啄木鳥に向かつて「このみったくないお婆さんで私はあるが、汝に行く道を教えてやろうよ」と云い、村に迷い込んできた啄木鳥に十勝川を下って海上の神のくに (kamui-noshi) へ行くように告げる。しかし、末尾では、「と人間のお婆さんは、炬縁の上を煙管でたたきながらそういったところその啄木鳥は家から飛び出し見えなくなつた」とある。つまり、一人称の叙述は終始一貫していない。

V 染退人とその他の自叙

『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』のなかには染退人の自叙が三篇ある。そのうち、神謡一〇〇(サケへ Hemu noye)では語り手は染退の酋長で、「眠っている人も眼を覚ましている人も神々のあり様を、私が言うから良く聴いて下さい」とあるが、それにつづく話は三人称で語られる。これは、十勝川の川上の酋長の一人娘と結婚して、その家におさまっていた若者(河童) Ⅱ川の主が、十勝川から食料(魚)の種となる霊(ramachi) をさらって染退川の川上にやつてきてから、この川には魚が豊富になると同時に溺死者がでるといふ話である。酋長の直接的な経験は最後の「夢を見た」といふ部分だけである。神謡一〇一(サケへ Hemu noye)は類話であるが、そのなかには数人の「私」が登場し、三人称の話が幾重にも重複し

ている。

神謡九十四は Matanki-tono の自叙、すなわち、和人のマタギが語つた話である。サケへは Hachori hachori。「ただ一人稼ぎして世過ぎする者」である我が、「山狩り神(狼)から体力と脚力だけでなく、一生涯の恵を授かり、長者になつた次第を語り、大口の真神を祭るよう」遺言して死んだという。一人称叙述は終始一貫していない。アイヌの口承文芸には和人の散文説話と称される昔話があるが、マタギが「カムイユカラ」の叙述主体であることは如何にも不自然でありはしないか。

神謡一〇二(サケへ Hanrewa rewā)はいわゆる「素性明かし」がテーマの話で、語り手はある大長者である。相手は「八枚の苫筵を帆にかけた舟で村々を回り、自分の素性を訊ね、それを解き明かせない首領から宝物を奪っていく者」で、語り手の長者が素性を明かすと、男は朽木の山に変わる。長者は男が奪つた宝物を元の持ち主たちに返し、沢山の返札を授かつてますます長者となつて栄えたと言ふ。

VI 神謡の条件

神謡のもつとも大きな特徴はサケへであるが、これについて知里真志保は、「折返(サケへ)を以て謡われる」といふことが、必須条件であり、それは「まさに決定的である。この条件さえ満たされるならば、主人公が人間であつても、説述が第三人称で行われても、アイヌはそれを神謡と認めるのに躊躇

しないが、反対に主人公が神でも、第一人称で語られても、折返をもって謡われるのでなければ、それをただちに神謡とは認めないのである」と極端な強調をしている。「知里真志保 1978:178」。なるほど、民俗的（イーミック）な範疇では、その通りであろうと認めるとして、比較研究の観点からいえば、この主張に疑義をはさむことは許されよう。実際、久保寺自身は人間が叙述主体の「神謡」を神謡とすることについて、常にわだかまりを表している。神謡九十八「メナシの女の自叙」について、「これを神謡の中に入れられる所以のものは、神謡の重要な要素（或は必要条件）たる sakehe が挿入されて謡われる点にある。Sakehe をとり、これを三人称叙述の口語体とすれば、『人間の昔話』Ainu-uwepeker となるものである」という「久保寺 1977:390」。同様の指摘は神謡八十九、九十二、九十四についても繰り返され、また、神謡九十一「人間の狂女の自叙」については「これは sakehe を変え、yashamane na という語を基調としていけば、Chish-shinotcha（涕泣歌）にでもなりそうな内容のものである」としている「久保寺 1977:410」。

VII 結論

話型やテーマからみて他のジャンルとなり得べき話を「神謡」とするに当って、決定要因が唯一サケヘであるとするなら、逆の推論も可能である。すなわち、本来は散文説話などであったものを、語り手がサケヘを付して語ったという語りの可塑性

である。久保寺の収集になる神謡では、サケヘを伴う神謡の原初的な姿は、主として「動物・カムイ」が叙述主体となる説話群であったと筆者は考える。そして、その語り手が大局的には女性であったことに鑑るなら、散文説話などを自らのレパートリーにとり込むに際して、語り手がサケヘを挿入したということとは大いにあり得たであろう。このような想定に立つなら、女性の語り手がサケヘを自在に操ることによって如何に多様な「カムイユカラ」が紡ぎだされたかを理解することができる。そして、この視点はこれまで無批判に踏襲されてきたアイヌ文学成立のシナリオを根本的に見直す緒となるであろう。

注

(1) 筆者は、カムイユカラのなかで、動物神を叙述主体とするユカラについて次のような分類を試みた。

1) 【動物世界と人間世界との関係をテーマとする神謡】

a 型 負の行為―遺戒、b 型 正の行為―垂範、c 型 儀礼・崇拜の由来、説明、d 型 動物の特性の説明

2) 【恋愛、求婚、婚姻をテーマとする神謡】e 型 動物

神と動物神の恋愛・婚姻譚、f 型 動物神と半神半人の

恋愛・婚姻譚、g 型 メノコユカラに準ずる神謡【荻原

1996:394-477]

(2) 因みに、知里幸恵『アイヌ神謡集』に収められている十三篇の叙述主体は、梟の神、狐、兎、谷地の 魔神、小狼

海の神、蛙、小オキキリムイ、獺、沼貝である。このうち、オキキリムイを除くなら、すべては自然界の生きものや現象である【知里幸恵 2001】。

- (3) カムイ (Kamuy) の原義について、沙流方言の辞書では、①「神」、比喩的に②「神のように立派な、非常に立派な」の意、具体的に「熊」とある【田村 1996:270-271】。千歳方言の辞書では①カムイ、神、自然、②特にクマ、③人間であって、非常に立派な人、④かみなり、⑤(連帯修飾用法で) 非常によい、美しい、非常に危険な意が挙げられている【中川 1995:146】。Bachelor の辞書では「A god. A bear. A title applied to anything great, good, important, honourable, bad, fierce or awful.」【Bachelor 1926:225】。萱野の辞書では、①神、②熊とあり、多くの用例が挙げられている【萱野 1996:198】。

- (4) これはアイヌの説話での特徴の一つで、「水神」への供儀の前段をなしているが、ユーラシアの諸民族の説話ではそのような人間的な苦悩については一般に触れない。
- (5) 金田一の採録になる神謡「アオロン」には、「幌泉の昔話」と添え書きがある。「アオロン」はサケノで話の内容は紫雲古津の豪族の遠祖の昔話である【金田一 1942:132-137】。

- (6) 染退は現在の静内町静内とある【久保寺 1977:433】から、

染退川は静内川であると仮定するなら、これは日高山脈を挟んで十勝川の西側に当たると。つまり、河童は山越えをして、静内川に魚をもたらしたということになる。

参考文献

- 荻原眞子 一九九六 『北方諸民族の世界観—アイヌとアムール・サハリン地域の神話・伝承』草風館
- 萱野 茂 一九九六 『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂
- 金田一京助 一九四二 『ユーカラ概説』青磁社(『金田一京助全集 第八巻』所収)三省堂
- 久保寺逸彦 一九七七 『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店
- 田村すず子 一九九六 『アイヌ語沙流方言辞典』草風館
- 知里真志保 二〇〇一(一九七八) 『神謡について』(知里幸恵) 『アイヌ神謡集』163-185頁
- 知里幸恵 二〇〇一(一九七八) 『アイヌ神謡集』岩波文庫
- 中川 裕 二〇〇〇(一九九五) 『アイヌ語千歳方言辞典』草風館
- J. Bachelor 1926 An Ainu-English-Japanese Dictionary. Kyobunkan

(おぎはら・しんこ) 帝京平成大学